

聖地のこどもニュース オリーブの木

No. 18 2006年2月



〈上〉東エルサレム：学校帰りのいたずら坊主たち。くったくのない笑顔が可愛い。

支援者の皆様、今年に入ってイスラエル・パレスチナ情勢は非常に流動的になってきました。1月25日の「民主的選挙」でのハマスの大勝利、シャロン首相の病氣、そして3月28日に行われるイスラエル総選挙など、世界中が中東和平の行方はどうなるのかと、息を詰めて見守っています。私はこの春の「平和を願う対話の旅」準備のため、2月上旬に1週間ほどエルサレムに滞在しました。その際現在の情勢について現地の人々といろいろ話しました。彼らの反応は意外に冷静で、「何かが動く、しかもきっと良い方向へ」と、希望さえも伺えました。この希望実現のため、今年もよりいっそうのご支援をお願い申し上げます。

理事長 井上 弘子 スタッフ一同

NPO 法人 聖地のこどもを支える会

事務局：☎ 164-0013 東京都中野区弥生町 1-19-1-201
Tel & Fax : 03-3379-5571 e-mail : seichi@k.email.ne.jp
ホームページ : <http://www.ne.jp/asahi/seichi-no-kodomo/org>
郵便振替 : 00180-4-88173

フェレット神父のメッセージ



驚きました。本当にびっくりしました。おわかりいただけるでしょうか？今の国際社会では民主主義の名において、小国は何をするにも大国の同意を得なければならないのを、私は知っています。でも民主主義ってどこにあるのですか？

西欧社会はパレスチナ人に「民主的選挙」を要求し、その選挙が公正に行われるように、数百人もの国連オブザーバーを送りこみました。すべてはうまく行きました、ただ……結果はハマスの圧倒的な勝利でした。するとアメリカとイスラエルは、選挙で不正が行われたと言い出したのです。自分たちこそ民主主義者だと自負している連中は、パレスチナで評議会議員として民主的に選出された人々が、自分たちの意にそわないという理由で、新たな「亡霊」を作り出そうとしています。

こちらでは、私たちはハマスが勝利して嬉しく思っています。今までの汚職にまみれたファタハの政治家や公務員たちはもううんざりです。交代が必要です。ハマスなら、もっと真摯に透明性をもって、政治や行政を行ってくれるでしょう。

「でもハマスはテロ集団じゃないか！」という人がいるかも知れません。「そんな運動は信用しては駄目だよ」と。「そう、もっともだね。でも反面、希望があるよ。」

パレスチナ人の権利を守ることを目的として、ハマスは今まで、理解に苦しむ激しい言葉を言いながら、闘争の道を走り続けてきました。もちろん彼らのしてきたテロ行為は、どんな理由があっても非難されるべきです。しかし自由と尊厳を要求する運動は、テロ集団でしょうか、それとも解放運動とみなすべきでしょうか？

モーゼやヨシュア、サウルやダビデなど、旧約聖書に登場するリーダーたちのことはさておき、イスラエル自身、イルグンやハガナ（1920年代から50年代までテロ行為をもためらわず、武力を行使して闘った独立運動）のおかげで独立し、成長して行くことができました。イスラエル人たちも今では、彼らに感謝しているのです。その上彼らのリーダーが後にイスラエルの首相となり、エジプトやヨルダンとの平和条約に署名までしました。

回心も変化も、固まってしまった人間には望むべくもありません。それは自由と平等と尊厳という理想に生かされている人のみができることです。私はハマスがこれからきっと変わり、政党として組織化されていくと確信しています。後代の歴史は、ハマスはテロリスト集団ではなく解放運動であったというでしょう。「インシャ・アラー！」（「神のおぼしめしのままに」の意）

状況がどう動いていくか、3月28日のイスラエル総選挙まで待ちましょう。

これから聖地がどうなるかを心配し、危険が迫っているから聖地を去るようにと私に忠告してくれる人々、また「亡霊」を恐れている人々に申し上げたい。どうぞ巡礼者として聖地に来てください、そして私たちの学校を訪問し、キリスト教徒、（2ページへ）

イスラム教徒、ユダヤ教徒、パレスチナ人やイスラエル人と兄弟として出会い、ふれあいの時を持ってください。ここからのもてなしを名誉と見なす国、そして支配するものも支配されるものもないより良い世界を夢見る学生たち、互いの憎悪と闘争に駆り立てようとする目に見えない悪魔的圧力にもめげず、尊敬しあい、受け入れあっている信者や草の根の人々に出会うことができるでしょう。

ハマスの台頭はこの世の終わりではありません..... 平和交渉再開のきっかけとなるかもしれません。私は人間に対する信頼を失っていません。私たちは忍耐と希望によって救われるのです。

2006年2月24日 連帯事務局長 ピエトロ・フェレット神父
(イエスの聖心会司祭)

ミニ・ミニ辞典 「ハマス」と「ファタハ」ってなに？

ファタハ：1950年代前パレスチナ自治政府議長、故アラファト氏が組織したパレスチナ解放機構（PLO）の最大派閥で、ここ数年自治政府の中枢を担ってきた。しかし和平プロセスはイスラエルとの交渉に失敗して、膠着状態になり、さらに幹部に蔓延している汚職体質などから、民衆の支持を失い、評議会選挙に大敗した。新旧世代の内部亀裂や対立などがある。

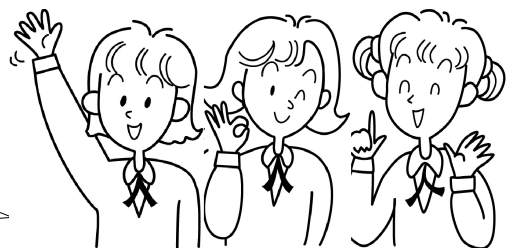
ハマス：エジプトのイスラム組織「ムスリム同胞団」の影響を受けて、1987年にガザ地区で故ヤシン師が創立した。当時、PLOとの交渉を拒んでいたイスラエル側の肩入れもあったという。皮肉なことに、今その「ハマス」がイスラエルを認めず、自爆攻撃を繰り返しているが、一方では貧困層のために福祉、医療、教育などの援助をし、一般民衆の支持を受けている。このように草の根の支持基盤があるとはいえ、今回の評議会選挙では、予想外の大勝利を収めた。彼らはこれからパレスチナ自治政府を率いるという大きな責任を負うことになる。

イスラエル・パレスチナ・日本
平和をつくる子ども交流プロジェクト

平和を願う対話の旅

2006年3月22日～4月3日

この旅に参加する高校生が、出発前の
感想・希望を書いてくれました。



石黒 朝香

6ヶ月前に「平和をつくる子ども交流プロジェクト」に参加した時の感動を、今も鮮明に覚えています。みんなと会う前は不安だらけで、2週間無事に終わられるのだろうかずっと緊張していました。しかし、そんな心配は無用どころか、日本に来てくれたイスラエル・パレスチナの高校生たちはステキな人達でした。紛争のこと、文化、習慣、お互いの家族のことなど、旅を通して話したことは広範囲にわたり、私にとって「未知の国・遠い国イスラエル・パレスチナ」が、「私の友達がすむイスラエル・パレスチナ」へと、変貌していきました。

旅が終わった後も、パレスチナ情勢は変化し続けました。旅の直後に始まったイスラエル軍によるガザ地区撤退、イスラエル議会の解散、パレスチナ評議会選挙、常に起こっている自爆攻撃やイスラエル軍の爆撃…。何かが起こるたびに、夏に出



会ったみんなの顔が思い浮かびました。身近に感じられるようになったことで、みんなは大丈夫だろうか、どう感じているのだろうか、と気になることもたくさんありました。

イスラエル訪問の日が刻々と迫り、期待もだんだんと大きくなっています。全日程を通じて一番大切にしたいことは「出会い」です。夏の時の高校生との再会をはじめ、彼らの家族、そして全く知らなかった人々にも会おうと思います。どれだけの話ができるか分かりません。話をしても理解できないかもしれません。それでも、面と向き合って話を聞く姿勢の大切さを8月に学んで、私自身が一つひとつの出会いを大切にし、相手を理解しようという姿勢を見せること、このこと抜きに今度の旅を終えることはできないと思っています。日本にいては分からないこと、彼らの実生活などを感じ取りたいと思っています。

遺跡もたくさん回りますが、もともと私は宗教にふれたことでエルサレムに興味を持ったので、とても楽しい場所のひとつです。特に、ユダヤ教やイスラム教は日本ではあまりなじみのない宗教ですが、彼らの生活や考え方に根源で影響しているのはやはり宗教であると思います。遺跡や歴史的な場所を訪れることで、彼らが大切にしていること、守り伝えていきたいもの、という日本人にはないバックグラウンドを感じられるのではないかと思います。

私は四月から大学に進学します。新しい環境での生活を始めるにあたって、今までとは違う新しいこと・見識を身につけるチャンスでもあると思っています。私たちにできることは限られていますが、その枠の中でできることをよく考え、帰国後も私自身の生活に活かし、周りにも伝えていきたいと思っています。

滝川 理沙

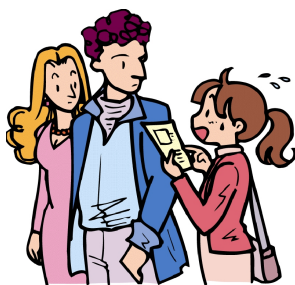
今回、イスラエル、パレスチナ訪問にあたって、私は特に、現地の人々、特に世代の人々や小さな子供たちの「表情」をしっかりと見てきたいと思っています。

私は、夏休みにイスラエル、パレスチナの高校生に出会い、友達になって彼らのおかれている現状を直接聞くまでは、はっきり言って彼らの国の間に起こっている問題は全くといって良いほど関係のない問題だと考えてきました。それは、きっと、日本からとても離れているからという理由もあったと思いますが、それよりも、イスラエル・パレスチナ間には日頃から、テロや暴動が起こっているということは知っていても、何故そのようなことが起こっているのか、現地に住む人々が実際にどのように、心に傷を負っているのかという事などを知る「きっかけ」が私の周りには

なかったからだと思います。

夏休みにイスラエル・パレスチナの高校生と一緒に旅をして、私は一つ夢を見つけました。それは、彼らのように紛争下で生活をしている同世代の人々、戦争や紛争を始めとして貧困や病気で苦しんでいて、将来の夢や希望を持ちたくても土台がしっかりしていなくて持てない子供たちのために働くということです。私が抱いている夢は今この場で言っても、何故私がこのような事を思うようになったのかと自分自身で深く考えても、とてもあいまいな形でしか表現できません。しかし、

とにかく、イスラエルやパレスチナの高校生が私に話してくれ、つらい経験、そして彼らのおかれている立場についての現状を聞き、もっと彼らのように苦しんでいる子供達の現状を知り、私が実際にどのような形で、今、そして将来、行動すれば良いのかを考え、その上で私のように世界の各地で苦しんでいる人々（特に子供たち）の現状を知る「きっかけ」がない人々へ実情を伝えたいと思います。



特に私が今回の旅の中で一番楽しみにしていることは、やはりイスラエル、パレスチナの高校生に再会し、彼らが日常、どのような生活をしているのかと直接自分も経験する上で、知ることです。また、イスラエルでの高校訪問や難民キャンプを訪問することもとても楽しみにしています。いくら紛争下にあったとしても、そこは、日本の高校生と同じように勉強に一生懸命になる姿にふれることができ、そして、たくさんの人々の笑顔に出会える場所だと思っています。日本の高校と違う点をいっぱい見つけ、同世代の人たちとたくさん話が出来れば良いなと思います。そして難民キャンプでは、きっと、想像もできないような過酷な環境で生活をしているたくさんの人々、そして、紛争によって、破壊された建物を目にするでしょう。そこでは、目をそらさず、現状を学び、特に難民キャンプで暮らす子供たちの様子を見たいと思っています。

今回の旅は、私にとって、自己発見の旅にしたいと思っています。イスラエル・パレスチナという私の知らない世界（もしくは第三世界かも）に行き、大勢の人々と出会い、紛争のたえない地に住む彼らの苦しみや悲しみを聞き、彼らのいろいろな感情、表情をしっかりと学び取り、自分の将来につなげる旅に出来れば良いなと考えています。そして特に、夏のプロジェクトで学んだ「何よりもまず《対話》すること」の大切さを頭に入れて、この旅に出発したいと思います。

聖地の子どものための 春のバーゲンセール

死海の化粧品各種、その他イスラエル・フランス・イタリアなどの

ロザリオ、オリーブ細工、十字架、聖像など **10%～50%引き**

日時：3月12日（日）10：00～16：00 会場：サンパウロ宣教センター

（四ツ谷駅徒歩2分）

「聖地のこどもを支える会」は、昨年の【イスラエル・パレスチナ・日本「平和をつくる子ども交流プロジェクト」】の続きとして、3月22日から4月3日まで、日本の高校生たちの聖地旅行《平和を願う対話の旅》を実施する予定だ。私はその旅行の準備のため、2月初旬、一週間ほどエルサレムに滞在していた。それは平和のために働く人々と出会った素晴らしい時でもあった。その中の一つの体験をお伝えしよう。

イスラエルの平和デモ
参加体験記

ストップ・ザ・占領！

WOMEN IN BLACK

理事長；井上 弘子

ある日、一人の神父に紹介されて、私はイエズス会のデイヴィッド・ノイハウス神父を訪ねた。ドイツ系のユダヤ人で、改宗してカトリックになりイエズス会に入会した人である。現在神学を教えながら、平和活動に携わっているそうだ。いろいろな話の後、「これから平和デモに行くけれど参加しないか」と神父に誘われた。

雨の降りしきる中、シャロン首相公邸の前、車の通りの多い交差点に着いてみると、女性たちが何人も集まってきていた。天候のせいでその日は集まりが悪かったそうだが、それでも15人くらいはいた。彼女たちは「黒衣の女性」^{ウイメン・イン・ブラック} WOMEN IN BLACK というイスラエルの平和団体のメンバーで、17年も前から毎週1回こうして、「占領政策」に反対し、和平交渉の続行をうながすために、こうして沈黙のデモを続けているという。中でも私の目を引いたのは、82歳のおばあちゃんだった。雨の中じっとプラカードを持って座り続ける（8ページの写真）。彼女はこの毎週のデモをほとんど欠かしたことがないそうだ。

横断幕を持つ女性たちも風にあおられながら、足を踏ん張って立っている。ノイハウス神父様も他の女性たちと一緒に、「ストップ」を意味する手の形に「占領はもう十分！」と書いた黒いプラカードをもって、植え込みの低い石垣の上に立っていた（8ページ写真）。私もプラカードを一本右手に、傘を左手に立ってみたが、時折横殴りに降ってくる雨ですぐにずぶぬれになった。

時折、信号待ちの車の窓が開けられて、キッパをかぶった入植者らしい男性が、罵声を浴びせる。「おまえたちのせいで入植地を撤退させられたんだぞ！」

また道行く他の歩行者も「おまえたちがそんなことをするからハマスが勝利しちゃったじゃないか！」と怒鳴っている。

しかし婦人たちは、そんな非難に反論せず、穏やかな表情を崩さないで、ただ黙って立ち続けていた。彼女たちの中には、たび重なる戦争や自爆攻撃で子供を失った母親も多くいるという。

私はそんな彼女たちの姿に感動した。翌日この会の責任者ギラ・スヴィルスキーさんを自宅に訪ねて、彼女たちの活動や主張について聞いた。



彼女たちの団体【WOMEN IN BLACK^{ウィメン イン ブラック}】は、さまざまな平和運動を行なっているイスラエルの《平和のための婦人連盟》に加入している9団体の一つで、国際的な広がりを見せている。主にイスラエルの占領政策終結を提唱し、正義と公平と相互の譲歩に基づく和平達成・パレスチナ独立を訴えており、今まで2度ノーベル平和賞の候補としてノミネートされたそう。

私は、今月22日から行われる《平和を願う対話の旅》に参加する高校生や青年たちに、ぜひ現地でこの団体の人々に会って、話を聞いてもらいたいと思っている。



父の誇り

05/11 New York Times 記事より

2005年 11月7日ヨルダン川西岸地区ナブルスでイスラエル兵に射殺された少年の父親イスマイル・カティブは、臓器移植を待ち望んでいたイスラエル人たちに息子の臓器を提供した。彼は、息子の魂がすべてのイスラエル人の中で生きていると語った。

パレスチナ人社会の一部から憤りを買う恐れがあるにもかかわらず、彼は自分の決断をとて誇らしく思っている。「だれも、私に何をすべきかなどと命じることにはできない。息子の臓器で6人のイスラエル人を助けることができるととても嬉しい…… 息子が全てのイスラエル人の心の中に入ってしまったかのように感じる」という。



カティブの息子12歳のアフメドは、イスラエル軍がジェニンを急襲した際に銃撃を受けた。アフメドがおもちゃのライフルを持っていたので、武装パレスチナ人と間違えたのだとイスラエル兵たちは弁解した。

アフメドは銃撃による怪我がもとで、数日後にイスラエルの病院で死亡した。翌日、アフメドの腎臓と肝臓、肺、心臓が、生後7ヶ月の乳児から58歳の女性にいたるまで、ユダヤ人、アラブ人、そしてドルーズ人にも移植された。

息子アフメドの臓器を提供する決断をした父親は、その理由を、肝臓移植を待ち望みながら24歳で亡くなったアフメドの兄の思い出と、国籍にかかわらず人を助けたいという家族の願いだと語った。彼は、この行為がイスラエル人とパレスチナ人に対する平和のメッセージとなることを切望しているという。

「幼い子供たちなんですよ。宗教の違いなど関係ありませんよ。」

少年が亡くなった状況が状況だけに、パレスチナ人の中には、この臓器提供に疑問を感じる者もいるにちがいない。しかし、ジェニンの隣人たちはみな彼をたたえている。

イスラエルでは慢性的に移植のための臓器が不足している。医療関係者の多くは、臓器提供に対するユダヤ人の宗教的タブーに原因があると見ている。

カティブはこの件に関して多くの人たちから電話を受けた。その中にはイスラエルの副首相エフード・オルマート（前エルサレム市長・現首相代行）もいた。オルマートは少年の死を詫び、彼をエルサレムに招待したが、カティブ自身は招待を受けるかどうかは、まだ決めていないという。

フォトアルバム

今回お届けする写真は
井上弘子が今年2月上旬に
エルサレムで撮ったものです。



イブラヒム神父

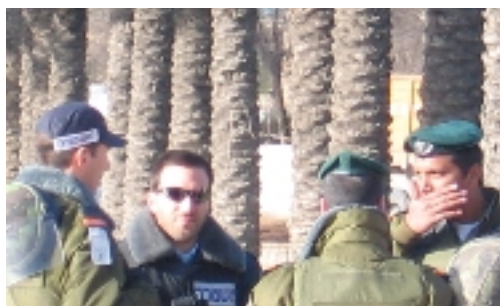


上：エルサレム：学校帰りの子どもたち



エルサレム：ダマスカスゲートの金曜日の朝

金曜礼拝のためアル・アクサ・モスクへ行こうとするイスラム教の若者（上）を阻止するため、旧市街のすべての城門にイスラエル兵および警官が配備される（左2枚）。若者たちは憤まんやる方ない面持ちで、兵隊たちを見つめている。



右：この83歳のイスラエル人女性は17年もの間、毎週ここに座って占領反対と、双方の譲歩と正義に基づく和平達成を訴え続ける。
（黒衣の婦人「メンバ」 本号記事参照。この日は雨風がひどく、厳しい寒さだった。左：このデモに毎週参加し、平和を訴えるイエズス会のノイハウス神父

